

西欧のモラル・サイエンスの系譜から見た モラロジーの破天荒性

川窪 啓資

目次

- 一 はじめに
- 二 西欧のモラル・サイエンス
 - 1 道徳哲学とモラル・サイエンス
 - 2 ベイティの『モラル・サイエンス提要』
 - 3 ウェイランドの『モラル・サイエンス提要』
 - 4 レズリー・ステイブンの『倫理の科学』
 - 5 その他の偉大な道徳哲学者たち―シチウィックとポーター
- 三 廣池のモラロジーの出現
 - 1 (十九世紀末から一九二〇年代までの) 現代科学をモラロジーの体系に応用したこと
 - 2 廣池の方法論
 - 3 聖人研究―最高道徳の世界
- 四 未来のモラロジーに向かって

一 はじめに

今回私の取り上げるテーマは、廣池千九郎のモラロジー、それは世界におけるさまざまなモラル・サイエンスの一つでもあるが、廣池の道徳科学たるモラロジーの意義を明らかにすることである。事実、廣池の大著は『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』という書名になっているが、「新科学としてのモラロジー」とは何か、それをモラル・サイエンスの歴史的文脈の中に置いてみて、モラロジーが他のモラル・サイエンスとどのように違ってゐるか、その方法論、内容、実質の「破天荒」性を明らかにしたいと思う。そのことに

よって、廣池が他のモラル・サイエンスと彼のモラル・サイエンスとを区別するために、何故、モラロジーという新語を造ったかを明らかにする。第二にモラロジーの独特な特徴を指摘し、第三にトインビー的によれば、解体期にあるとも言うべき現代社会において、新しい文化の創造を希求する最高道徳の意義について卑見を披瀝したい。

二 西欧のモラル・サイエンス

1 道徳哲学とモラル・サイエンス

道徳哲学が科学と関係があることを含意していることを示す先例は、トマス・ホッブス（一五八八—一六七九、英国の政治哲学者）の『リバイアサン』（一六五一年）の中で、「道徳哲学は何が善で何が悪なのかを探索する科学以外の何ものでもない」（六五、七九頁）と書いている。Oxford English Dictionary 『オックスフォード英語辞典』によると、十七、十八世紀においては、現在 science で一般に表されている概念は普通 philosophy で表されていた。そうすると、「道徳哲学 (moral philosophy)」はモラル・サイエンスと読むことができる。

Oxford English Dictionary に現れる“moral science”の初出

の例は、一八二八年のペイン (G. Payne) による *Elements of Mental and Moral Science* (『心的及び道徳的科學提要』) という本である。しかし、それより四十八年前にベンジャミン・フランクリンが、ジョウゼフ・プリーストリー (Joseph Priestley 一七三三—一八〇四、英国の科学者、牧師で、酸素の発見者) に、一七八〇年の二月八日付の手紙を書いたが、その中で「人間がお互いに狼であることを止め、ついにぬけぬけと人間性があるんだといっていたものを学んでくれるほど、モラル・サイエンスが相当によくなればよいのになあ」と述べている。また、同じ年、つまり一七八〇年にジェレミー・ベンサム（一七四八—一八三二、英国の哲学者、功利主義を唱えた）が『道徳および立法の諸原理序説』を出版したが、その中で道徳科学という言葉を使っている（世界の名著三八『ベンサム、J・S・ミル』中央公論社、一九六七、一九七六年、八一頁）。この二人の文章中にあるのが私の発見したモラル・サイエンスの最初の用例である。

廣池は『論文』第一章第一項「いわゆる道徳科學の定義並びに學術上の名稱」（五—七頁）および第二項「従来欧米において道徳実行の効果を科學的に研究せんとせし學者の計画」（七一—四頁）において十数人の學者を紹介しているから、もちろん系譜的には廣池のモラロジーとつながると言えよう。しかし内容的に吟

味すれば、先行の諸研究とモラロジーは大いに異なると言わざるを得ない。私はモラル・サイエンスを単独に書名とした最初であるジェイムズ・ベイティの *The Elements of Moral Science*, 2 vols. やその他のモラル・サイエンスを冠している書物、および冠していないが実質的にそうであると廣池が言及しているレスリー・ステューブンの『倫理学』（廣池は原名 *The Science of Ethics* を倫理学と訳しているが、内容的にはそう訳してもよいようなものである）その他を取り上げ、モラロジーと異なることを明らかにしたい。

2 ベイティの『モラル・サイエンス提要』

モラル・サイエンスが単独に書名として初めて出たのは、私の知る限り、ジェームズ・ベイティの『モラル・サイエンス提要』（*Elements of Moral Science*, Philadelphia, Press of Mathew Crey, 1790-1793）の二巻である。ベイティ（一七三五一—一八〇三）はスコットランドの常識派の哲学者の一人であり、デイヴィド・ヒュームの形而上的懐疑主義の言うところの「常識は幻影にすぎなく、信頼できない」という説に反対して、「常識は基本的に健全である」とした。彼のモラル・サイエンスはその主張に基づいて、ツーガルド・スチュワート (Dugald Stewart 一七

五三一—一八二八、スコットランドの常識派の哲学者) も同じ系列の学者である。

さて、このベイティの二巻は総頁、一一二六頁(四三八頁十六八八頁)の大著で、『モラル・サイエンス提要』と銘打っているが、さきほど *Oxford English Dictionary* で説明したように、*moral philosophy* と同じである。全巻を通読してみると、内容は十八世紀末のスコットランドの博識、穩健なる学者の心理学、自然神学、論理学、政治学、法学、倫理学、ギリシア・ローマの古典、英文学等が断片的に言及されている。しかし、背後にはキリスト教の信仰が強く入っていて、靈魂の不滅とか因果律に対する確信(第一巻四一四—四三八頁)が詩的な言葉で語られている(彼は詩人でもあった)。その他、詳しく述べられなくて残念だが、奴隷制が行われていた時代に、黒人差別は道理に適わないことをはっきりと主張している。ただ半世紀後の Abolitionism (奴隷制度撤廃論) まで進んでいない。これは後のウェイルランドの *The Elements of Moral Science* の初版(一八三五年)から版を重ねるに従って変化していることを考えれば、時代的制約があったことが分かる。ベイティの大著は当時の道徳科学(内容は道徳哲学)を示す好著である。

3 ウェイランドの『モラル・サイエンス提要』

今あげたウェイランド (Francis Wayland 一七九六—一八六五) は、アメリカのブラウン大学の学長 (一八二七—一八五五年) を務め、その前はボストンの第一バプティスト教会の牧師 (一八二一—一八二六年) であった。彼はまた上記の『モラル・サイエンス提要』を出しているが、これは福沢諭吉によって日本にも紹介されて有名である。ウェイランドは本書において「モラル・サイエンスは倫理学、あるいは道徳哲学であって、道徳法の科学である」(一頁) と述べている。また「モラル・サイエンスは道徳法つまり正義と義、また道徳的因果律に関しては「道徳上においては、その結果はしばしば長く延期されるし、いつ結果が出るか、いつも不確かである」(四頁) と述べている。不思議なことに、というより当然のことながら、廣池はウェイランドの著書を、廣池の『道徳科学の論文』(以下、『論文』) では言及していない。それはウェイランドの『モラル・サイエンス提要』においては、道徳の実行と実行者の幸福との間の因果関係が研究されていないからである。ウェイランドが苦心したことは、「道徳律、道徳的行為、良心、意図、徳の性質、自己愛、祈り、安息日を守ること」などを明らかにすることであった。彼は自分自身の考えで貫いていたが、ときどき旧・新約聖書からの聖句やシェイクス

ピア、バトラー主教 (Joseph Butler 一六九二—一七五二)、イギリスの神学者、道徳哲学者)、アイザック・ニュートンを使って論じている。ウェイランドのモラル・サイエンスは、ブラウン (Joseph L. Bran) によって詳細な紹介がされるとともに、一九六三年にハーバード大学から新装出版された。

それではウェイランドのモラル・サイエンスはどのような倫理項目を分析しているであろうか。それは次のようなものである。

道徳律、道徳行為、行為の道徳的質、良心、あるいは道徳感、良心の決意が表現されるマナー、道徳的行為の規則、徳の性質、人間の幸福、自己愛、自然宗教、自然宗教と啓示宗教との関係、聖書(旧約及び新約)、神に対する愛、敬神の念、敬虔の念の涵養、祈り、人間に対する義務、正義と真実を語ること、奴隷の義務(二〇七頁、この箇所は奴隷解放後の版で改訂された)、所有権、誓約、純潔の一般的義務—結婚法、親と子の権利と義務、道徳教育(三二〇頁)、市民社会の一員としての人間の義務、市民の義務、慈悲の法(三六〇頁) などである。これが道徳科学なのかと思われるかもしれないが、前述のベイティのモラル・サイエンスもそうであったように、人の心を道徳的に導く倫理の本なのである。

4 レズリー・ステイーブンの『倫理の科学』

ところがウェイランドより半世紀ほど後に、レズリー・ステイーブン (Leslie Stephen 一八三二—一九〇四) の『倫理の科学』 (*The Science of Ethics*, 1882) が出版された。

レズリー・ステイーブンは『英国人名辞典』 (*Dictionary of National Biography*) の最初の編集者 (一八八五—一八九一年) として有名で、二十六巻中、第二十巻まで公刊した一八九一年激務による過労のため主幹を辞めた。主著に

The History of English Thought in the Eighteenth Century, 1876

The Science of Ethics, 1882

The English Utilitarians, 1900

English Literature and Society in the Eighteenth Century, 1904

などがある。また 英国の女流小説家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の父でもある。

ステイーブンは正統派の功利主義者であった。J. S. Mill を師と仰いでいた。そしてダーウィンの『種の起源』から大きな影響を受け、倫理をダーウィンの進化論と結びつけようとした。彼の『倫理の科学』は倫理が進化論によって決定されることを論じた

最初の本である。「真の科学的知識の一般に認められている試金石は予測能力である」(『倫理の科学』一一頁)。

ステイーブンは道徳に関する多くの事柄について分析をし、また推理をしている。例えば、効用、個人主義と社会、人種と社会的構成、中庸の徳と真理の徳、知識、良心、恥、尺度としての幸福、功利主義、便宜、道徳と幸福、道徳的訓練、自己犠牲などを、彼の先輩たちと同じように細かく分析している。そして道徳的因果律を明らかにしようと試みている。しかし廣池が同情的に、ステイーブンはこの試みに成功してはいないと述べている。

それは「科学が一般的に不完全であったこと、個々の行為が絶望的なほど不完全であり、且つ科学的心理学がなかったことなど」(『倫理の科学』II項、「道徳科学の諸困難」九—二二頁) があったからである。そしてレズリー・ステイーブンは、「徳と幸福との間には絶対的な合致はない」(四三四頁) と結論づけている。そして「倫理の科学は現実 (実態) を扱うものである。」(the science of ethics deals with realities (p. 450).)

moral science という言葉は十九世紀にはよく知られていたようである。例えばコンコードの聖人と言われていたエマソン (Ralph Waldo Emerson 一八〇三—一八八二) も『処世論』 (*The Conduct of Life*, chap. VI, *The Complete Works*, Vol.

VI, pp. 240-241) で使っている。

5 その他の偉大な道徳哲学者たち——シヂウィックとポーター
もう一人の偉大な学者はヘンリー・シヂウィック (Henry Sidgwick 一八三八一—一九〇〇、イギリスの道徳哲学者) である。この人の『倫理学の方法論』(*The Methods of Ethics*, 1st ed. 1874, 7th ed. 1901, 廣池は一九一三年刷りを使用) は名著の誉れが高いものである。

また、ノア・ポーター (Noah Porter 一八一一年—一八九二) はイェール大学の学長で「多くの点で哲学教授の中で最も偉大で博学であった」(Herbert W. Schneider, *A History of American Philosophy*, Forum Books, New York, 1946/1957, p. 163) と言われている。たとえそうであっても、ポーターは「モラル・サイエンスは義務の科学であって、義務を心理学的・哲学的の両面から科学的に研究するものである」(*The Elements of Moral Science: Theoretical and Practical*, Charles Scribner's Sons, New York, 1885, p. 7) と、彼の moral science の science は、義務、責務、知覚、意欲などのような倫理上の項目の分析レベルに留まっていた。それはもちろんのこと、彼の欠点ではなく、時代の逃れられない遅れのせいである。レズリー・ス

ティーブンの言う「科学の不完全さ」だけでなく、社会一般およびそれに伴う社会科学の未発達が、私たちにこれらのモラル・サイエンスが旧態依然であるという印象を与えるのである。モラル・サイエンスのサイエンスは良くて進化論を部分的に使っているという程度であった。

ポーターは前掲書でモラル・サイエンスは the science of duty と定義する。心理学と哲学の両面から義務を科学的に研究しているから道徳科学であると主張している。しかもそれは “upon a solid basis of fact” (p. 4) と述べていて、これは「倫理学は科学の領域に属しない」(*Republic, the 7th book*) と、ラトンの現実 is illusion とする説を否定する主張でもある。

アメリカの奴隷解放令はついに一八六五年に発布された。そこでウェイルランドの『モラル・サイエンス提要』は前述のように後の版で何度か改訂された。

二十世紀に第一次世界大戦(一九一四—一九一八年)が勃発した。オズワルド・シュペンングラー (Oswald Spengler 一八八〇—一九三六) が『西欧の没落』(*Der Untergang des Abendlandes*, 1918-1922) を発表し、またエリオット (T. S. Eliot 一八八八—一九六五) は『荒地』(“The Waste Land”, 1922) を出し

た。西欧人は彼らが文明の中心であると思っていた本拠地が連合国（主に、フランス、イギリス、ロシア、イタリア、日本）と同盟国（ドイツ、オーストリア、ハンガリー、トルコ、及びブルガリア）との間の戦場となったことを見てショックを受けた。第一次世界大戦後、人々は世界平和が喫緊の課題であることに気がついたのである。モラル・サイエンスをめぐる状況は、二十世紀初めの十年ぐらいまでと全く異なる。この時点で廣池のモラロジーが出現したのである。

三 廣池のモラロジーの出現

モラロジー成立の過程

モラロジー成立の過程を振り返ってみよう。廣池によれば、

一、宗教、思想的関心。明治二十八年から大正二年まで伊勢神宮の事業に従事。『古事類苑』編纂。明治四十二年『伊勢神宮』。明治四十二年天理教に入信。『支那文典』、『東洋法制史序論』、『東洋法制史本論』、『支那古代親族法の研究』で大正元年十二月法学博士となる。モラロジーの研究に着手（『論文』第一章二六頁参照）。

二、健康問題。明治三十七年（一九〇四年）過度の勉学のた

め過労。明治四十二年（一九〇九年）神経衰弱。大正元年大患「猛烈なる心の立て替え」一、の宗教的関心とつながる。

三、社会問題。二十世紀初めの労働問題、ソーシャリズム、サンディカリズム等の社会問題、さらに第一次世界大戦等の戦争の問題。

四、大正四年の困厄（天理教から批判され離脱）。一宗教ではなくモラロジー建設へ。

ここで私の特に取り上げたいのは『伊勢神宮と我国体』である。従来モラロジーへの展開の一契機として大正元年大患の「猛烈なる心の立て替え」がよく論じられているが、事は内面的なものでその内容は窺い知ることは難しい。ところがそれと前後する同書（大正四年）にはその内容は詳述されており分かりやすい。そこで私はその内容を明らかにしてモラロジーとの関連を明らかにしたい。

今私は分かりやすいと書いたが、読めれば易しいということ、それが一筋縄では参らぬのである。そこには古事記、日本書紀、及びその他の日本古典、古俗、伝説、儒教の古典、つまり大、中庸、論語、孟子、周易、尚書、毛詩、礼記、春秋左氏伝などが出てくる。ただ有り難いことには白文ではなく廣池が句読点、返り点、送り仮名をつけて下さっていることである。これな

ら読めないことはない。しかしここで感ずることは明治、大正期に国学、漢学で徹底的に鍛えられた廣池の学殖である。あたかも自家業籠中のもを取り出す如く開陳する手際は見事である。それでは国学、漢学で終わるかと思えばそうではない。のちの『道徳科学の論文』に連なる洋書も出てくる。

例えば

Hearn, Lafcadio, *Japan: an Interpretation*

Emerson, Ralph Waldo, "Compensation"

Starcke, C. N., *The Primitive Family: In Its Origin and Development*, 2nd ed. London, Kegan Paul, 1896 (1889).

Sutherland, Alexander, *The Origin and Growth of the*

Moral Instinct, vol. I, p. 103 ff.

Westernmark, Edward, *The History of Human Marriage*, 3rd ed. London, Macmillan, 1901 (1891).

などが用いられている。これらをも、モラロジーの研究は大正初期には厚みを増してくる。しかし『論文』で使われた洋書はこのほかに四百数十冊ある。廣池は図書館を使うことはできなかった。自分でこれらの本を購入しなければならなかった。その苦勞も並大抵のものではなかったことが偲ばれるのである。

『日本憲法淵源論』

「道徳実行の個人の幸福に及ぼせる効果」上、下には、東西の帝王、貴族などの運命の消長が述べられている。アレクサンダー大王 (356-323 B.C.)、ユスチニアヌス大帝 (483-526)、亜細亜においては黄帝、堯、舜、禹の子孫、殷の湯王、孔子の先祖 (殷の湯王の遠裔、微子開の末葉) の子孫、「闕裏文献通考」参照。

日本皇室、英国王室、ロマノフ家、ドイツ皇室ホーヘンツォルレルン家、英国貴族ハワード家、イタリーのメヂチ家などの徳とその結果の分析。このような視野と視点では西欧のモラル・サイエンスでは対象を西洋としても行われていない。そもそも家系の長さとの関係を調べるといふ視点がないからである。(もともと廣池はその追加文 (四七) において英国の系図局のことを述べている (『論文』二七九—二七九二頁)。

『道徳科学の論文』(初版一九二八年)

西欧のモラル・サイエンスの本をいくつか読んでからこの『道徳科学の論文』へ読み進むと、まず驚くのはその方法論というか学問の範囲が非常に広いということである。『論文』第一章第五項「モラロジーの基礎を成せる諸科学」(五六頁) には次の諸学問の名前が出ている。

地質学、地文学 (physical geography)、生物学、進化論、
 発生学、〈遺伝説を含む〉、環境改良学 (euthenics)、人種改
 良学 (eugenics)、土俗学 (ethnography)、生理学、人類
 学、人種学 (ethnology)、人種起源学 (ethnogeny)、考古
 学、法理学、骨相学 (phrenology)、心理学、社会学、犯罪
 学、文明史、法制史、経済史、道德史、へ以上諸科学の分派
 に、比較土俗学、犯罪人類学、犯罪社会学、犯罪心理学、動
 物心理学、社会心理学、民族心理学を含む〉

以上西洋産の学問であるが、東洋からはもちろん国学、漢学、
 インドの仏教なども含まれる。これらを総合した学問のうえに立
 ってモラロジーが出来たのである。

前述したように西欧のモラル・サイエンスにはギリシア、ロー
 マの古典は出てくるけれども十八―十九世紀の学問はあまり出て
 こない。それは時代的制約でやむを得ない。「モラル・サイエン
 スの系譜から」という本論文の領域は、モラロジー出現までのモ
 ラル・サイエンスの系譜を検討すればよいのである。そこからは
 モラロジーに繋がるものは、あまり無い。

つぎに述べると、「economics was still part of the moral
 sciences tripsos at Cambridge University.」と現代の高名な経
 済学者 Kenneth E. Boulding が、「Economics as a Moral

Science”, p. 1, March 1969) で述べている。

現在でも、たとえばイギリスの Cambridge 大学に Moral
 Science の学科があるし、多くの学校で Moral Science の学科
 は教えられているが、ここでは問題にしない。ここで問題にした
 のは、二百年前からの欧米のモラル・サイエンスの本からは、モ
 ラロジーは殆ど影響を受けていないということである。廣池のも
 のは新基軸のモラル・サイエンスで、廣池はそれをモラロジーと
 名付けたということである。

『道德科学の論文』の構成

さて『道德科学の論文』の構成は次のようになっている。

序文

- 一―二章 モラロジーとは何か、人類生活の完成
- 三―四章 人類階級の先天的・後天的原因
- 五―六章 人類の精神的、物質的生活とその効果
- 七章 本能、知識、道德、社会の構成、文明の性質、人類の
 幸福
- 八―九章 進化の法則と現代思想 (帝国主義、軍国主義、社

会主義等) の誤り

十章 因襲的道德

- 1・正義的道德
- 2・破邪的道德
- 3・義理的道德
- 4・自尊的道德
- 5・慣習的道德
- 6・礼式的道德、交際的道德
- 7・一時的道德
- 8・感情的道德
- 9・反動的道德
- 10・無知的道德
- 11・知的道德
- 12・政略的道德
- 13・主義的道德
- 14・妥協的道德
- 15・団体的道德
- 16・利用的道德
- 17・児童的道德
- 18・平民的道德
- 19・恩惠的、温情的道德
- 20・修養的道德

- 21・迷信的道德
- 22・諂諛的道德
- 23・娛樂的道德
- 24・無價值的道德

十一章 文明進歩の傾向と道德の質的進歩

ここまではモラル・サイエンスの現代版とも言うべきところで、現実の道德現象のモラロジー的分析である。

Platoは「倫理学は科学の領域に属しない」(*Republic, the 7th book*)。

- 1 (十九世紀末から一九二〇年代までの) 現代科学をモラロジーの体系に応用したこと

ここまでのモラロジーの特色をまとめると、廣池は次のように述べている。すなわち、モラロジーの体系は、前記したように地質学、地文学、生物学、進化論、発生学(遺伝説を含む)……土俗学、生理学、人類学、人種学、人種起源学、考古学、法理学、心理学、社会学、犯罪学、文明史、法制史、経済史、道德史、その他比較土俗学、動物心理学、社会心理学、民族心理学などに基づいていると述べている(『論文』第一章第五項五三頁へ新版①五五―五六頁)。これらは Noah Porter, *The Elements of*

Moral Science, 1889 の “upon a solid basis of fact” (p. 4) に立った研究である。

ところが十二章からは最高道德という質的に高い道德が対象になる。従来の西欧のモラル・サイエンスとは異質の領域である。

『論文』はこのあとも続くが、廣池はこの十一章において、「因襲的道德は不完全ですが、東西の古聖人が実行された最高道德はそれぞれの場所で独り輝く指導的な星のようなものです」(『論文』の英訳、*Towards Supreme Morality: An Attempt to Establish the New Science of Moralogy* (以下、T.と略す) II, p. 111 (新版④二四三頁)) と言い、聖人研究に入る前に、世界の文明人の間に、最高道德に向かって進むとする一大傾向がさまざまな面で現れてきているとして、コスモポリタニズム(四海同胞主義)とヒューマニズムとを賞賛している。そしてフーゴー・グロテイウス(Hugo Grotius 一五八三—一六四五、オランダの法学者、国際法の祖)の『平和と戦争の法』(*De jure belli ac pacis*, 1625) や、イマニュエル・カントの『永遠の平和のため』(*Zum ewigen Frieden*) や、ウッドロウ・ウィルソン及び国際連盟その他を敬意をもって論じている。ただし、廣池はこのコスモポリタニズムとヒューマニズムについて、誤った方針で用いると、家族制度や国家の存在、階級制度に反抗する者が出て

くるかもしれない、その取捨には注意が必要だと付言している。

廣池は『論文』において、この問題に真正面から取り組んでいる。彼は道德実行と行為者の運命の因果律を個人の場合ではなく(顕著の場合は除く)、団体の場合を調査することによって明らかにしようとしている。この研究の前提条件は、不道德、因襲的道德、最高道德とは何かという道德の質を定義しておくことであり、また、それぞれの道德行為の結末を明らかにすることである。因果律の研究は単純なものではない。単なる外面的解釈だけでは十分ではない。外に現れた出来事に対する道德的・宗教的解釈を含めなければ、私たちは人生の深い意義を見いだすことはできないであろう。廣池は大正元年の自身の大患の折、「我幸にして大患に罹れり」と告白した。通常の場合は、この文章には「幸いに」という言葉は当てはまらない。しかし、彼の大患は彼の心を高め、人々を救済していく祝福となっていたのである。彼は道德的因果律の領域に品性完成の原理をもちこんだのである。この導入によってのみ何世紀にもわたる難問を解決することができるのである。

進化論を仏教の十法界の教理に適用した例をここに示す。十法界(*dasā dharmā-dhātu*) というのは生物を十の段階に分けたもので、人間を中心として向上すれば天上、声聞、縁覚、菩薩、

如来となり、墮落すれば修羅、畜生、餓鬼、地獄である。少し解

説を加えると、声聞 (śrāvaka) は仏陀の声を聞いたことのある者で、縁覚 (pratyeka-buddha) は師無しで悟りを得ようとする者 (他の人を救済しようとしないう) で、菩薩 (bodhisattva) は仏陀として選ばれているが、いまだこの世に留まり、他の人々の悟りと救済のために働く者で、如来 (tathagata) は仏の境地に達しているものである。廣池は次のように述べている。人間と動物とは同一のものであるということは、つとに聖人も認めておることにて、仏教の十法界の教えもそのとおりであり、人間が動物の域より進化して神もしくは仏に近づくには、純粹正統の学問である最高道徳を学ばなければならないということである (『論文』二四〇六―二四〇七頁 へ新版⑦三六四―三六五頁)。もし廣池がカール・ユング (Karl Jung 一八七五―一九六一) を知っていれば、人間性の心理学的解明もしたと思われる。

2 廣池の方法論

(a) 歴史的方法

人類の発達を太古の昔から古代、中世、近代へと研究する。また、個人を幼児、子供、青年から老年へ、心理学的・精神的に社

会的傾向を研究する。

(b) 国家的・文明史的発展という団体的研究

さきに述べたように、『論文』の第十一章には「文明進歩の傾向と道徳の質的進歩」とある。その中でコスモポリタニズム、ヒューマニズム、世界平和の思想、ウッドロウ・ウィルソンと国際連盟に高い評価を与えている。

ただし戦争については、「野蛮人はもちろんであります、我々文明人の祖先にありても、戦争は常態であって、平和は例外であった」(『論文』一一八九頁 へ新版④二四七頁) と書いている。

(c) 因襲的道徳と最高道徳の観点からという独特な見方をしている。ここから世界諸聖人の教説が入っている。

これまで倫理学者たちは道徳科学において倫理項目を細かく分析してきたが、廣池が八―十一章でなしたように道徳を分類してこなかった。要約すると次のようになる。

道徳の科学的研究とは何か。道徳実行の効果の科学的研究——そのためには道徳の定義、分類が必要。さらに心理学的分析、社会学的方法が肝要。

Utilitarianism との関係。

道徳の分類

- (a) 不道德 (b) 因襲的道德 (c) 最高道德
 - (b) 品性完成の科学
 - (c) 道徳実行の効果に関する科学的研究
 - (d) 道徳実行と実行者の幸福享受との一致とはだいたいにおいて認められるが、完全に一致とは云えない——Sidgwick
 - (e) 因果律——個人ではなく団体的に調査——個人でも特に顕著な人物の伝記で運命と道徳との関係を確かめた。
 - (f) 廣池の破天荒 unprecedented の意味
 - (g) Approach の斬新々
- Moralogy 卅 ethics 卅なご。Ethics は義務、善、正義とはなにか、を問う学問である。天上ではなく地上の事実、社会的、歴史的世界における幸福、不幸の分析、から始まっている。ところが、『道徳科学の論文』の十二章から質的に対象が大いなる変貌を遂げるのである。
- 『道徳科学の論文』の質的分析——プラトンの言えば、モラロジーと科学はなじまない。科学は事の具体的なものに基づくのであって、超合理的なものに基づくかないというのである。
- 『道徳科学の論文』における moral science から meta-moral science へ——社会的事実から超越的意味の領域へ。これはアー

- ノルド・J・トインビーの History からメタヒストリーへの転換と似ている（『高等宗教の世界へ』川窪啓資著『トインビーから比較文明へ』近代文芸社、二〇〇〇年、九五—一〇二頁）。
- ここでは詳述する余裕がないが、意味深いところである。
- (d) 因果律について長い世代間の記録を調べている。『論文』第十二章第七項第二節「古聖人の子孫」〔論文〕一六〇二—一六〇九頁へ新版⑥七〇—八二頁〕に『史記』『論語』を引用しながら、廣池は「これは現代の進化論的・遺伝学的ならびに社会学的研究の結果に合致するところであります」〔論文〕一六〇二頁へ新版⑥七〇頁〕と書いてゐる。
- 3 聖人研究——最高道德の世界
- ここから従来と異なる最高道德の世界に入る。第十二章では世界の四聖である孔子、釈迦、ソクラテス、キリストが詳説され、十三章は「日本皇室の基礎をつくられた天照大神の御聖徳及び日本皇室の万世一系の真原因」である。
- 廣池は天照大神の天の岩戸籠りから「慈悲寛大自己反省」という最も重要な格言を抽出している。
- 廣池は『古事記』について種々先輩の古典学者から教えを受けていた。それによると、天照大神の御顔は『日本書紀』に「光華

明彩六合を照らす」とあるように光り輝く美しさがあつたが、天の岩戸に籠られて自己修養をされてからは最も高貴なお顔になられたということであつた。天宇受売命はそれを申しあげてから、太玉命、天児屋根命が直ちに鏡を天照大神の前に差し出し、そこに美しいお姿が映り、それは誰かというところ「汝が命より、もっと貴い神がここにいらつしやるために」と天宇受売命が申された（もちろん鏡に映っているのは天照大神のことである）。そこで天照大神は国民的謝罪を受け入れ、大神は天の岩戸からお出ましになつて、太陽は再び宇宙に輝き、照らした。これが全天を輝かす大神という天照大神の尊号を持つている理由である。これは『古事記』に出ていることである。

天照大神のご容貌が天の岩戸籠りの結果変じたということが古人によつて伝えられているが、科学がまだ現代のように発達していないときにこのような伝説が存在することは事実である証拠ではないか、と廣池は述べている（『論文』一七七三頁〈新版⑥三二一頁〉）。この箇所は、イエス・キリストの変貌（マタイ伝一七、一一一三、及び、マルコ伝九、一一一三）や、日本の仏教の真言宗の開祖・空海（七七四―八三五）が清涼殿にて光り輝くお姿になったという記事を想起させる（虎関師錬著『元亨釈書』一三二二年）。

十四章は「最高道徳の原理・実質及び内容」である。

この章は『論文』の中心部分である。内容は豊かで深く、限られたスペースで十分に意を尽くすことはできない。簡単に概略だけを記しておく。

正義と慈悲

義務先行の原理

自我没却

神の原理

伝統の原理

人心の開発救済

純粹正統の学問

これらの重要項目はお互いに関連しており、連環している。以下、廣池の言葉を引いてみる。

古来世界の諸聖人及び大識者は一般に神あるいは本体の本質を以て正義及び慈悲となしている（『論文』一九三八頁〈新版⑦五〇頁〉）。

中国哲学にても『中庸』に、誠は天の道である、そして誠は自然の法と合致する、自然の法則は神の法の現れである、自然の法則は神の心の現れであるといふのである（T. III. pp. 24-25〈新版⑦五二―五三頁〉）。

西洋では哲学者、倫理学者、法学者の解釈はまちまちであるが、次の基本的な理解においては共通している。すなわち、自然法は神の法であって、法の本質は正義である。すなわち、中庸、平均、平等である、と述べてゐる (T. III. p. 25 へ新版⑦五三頁)。

人間性は善良さと罪深さの両面を持っている。最高道徳では神と人間に対して、意識的・無意識的に犯した罪を償うために、そして他方においては自分の人格を将来完成させるため自ら犠牲的努力をすることが要請される (T. III. pp. 51-52 へ新版⑦一一七―一二一頁)。ここには自分のもつともらしい道徳的行為についての独善性はない。

原初的普遍的神は本体であり、それはあらゆる宇宙の現象の究極的源である。時空を超越して絶対である。宇宙において現に生き、無始の始めから生きている実体であり、万物を支配している働きつつある人格的なものである。日本の伝統においては、本体と同一とされる神は天御中主神といい、中国では天・天帝、もしくは上帝と呼ぶ。仏教では最初、このような人格神を特に積極的に立てなかつたが、法 (Dharma) もしくは法身 (Dharma-kaya) がこれに当たるであろう。キリスト教ではエホバ、もしくはゴッドがこれに当たる。しかしながら以上の語はいずれも民

族的、もしくは宗教的連想を喚起し、宇宙根本唯一の本体たる神の普遍性を傷つけるおそれがあるので、最高道徳では、これらの地方的 (parochial) な名称を信仰の対象の名とはしない (T. III. p. 97 へ新版⑦二六―二八頁)。

宗教的解釈の神の第二の概念は本体が現実の人間社会に人間の形をとって現れたと申し立てられた化身の神である (T. III. p. 97 へ新版⑦二二八頁)。

この概念は今日一般人の理性には合しがないところがある。歴史の示すところ、及び我々の理性の判断の範囲内における解釈は、結局、化身となった神の最高道徳の実行は、始原の普遍的な神と同一化させることになったということである。その二、三の例は天照大神、釈迦、イエス・キリストである (T. III. p. 98 へ新版⑦二二八―二二九頁)。『論語』では孔子の品性を四絶と申して、四つの悪い所、すなわち、「意(わがこころ)なく、必(頑固さ)なく、固なく、我なし」(子罕第九)とある。

キリスト教では悔い改めはエゴイズムから信心深さへ改めることを言い、仏教では菩薩は無我となり、精神、肉体共に、仏陀の英知が深く浸透することである。無我あるいは自我没却とは人間が幸福を享受するためには実に重要な道徳的信条である。この条件こそ尋常人と聖人を区別する基準である。というのはいわゆる

聖人はすべて無我であるからである (T. III. pp. 82-83 へ新版⑦一九一—一九二頁)。

開発と救済については、ソクラテス、キリスト、釈迦、孔子の教説と事跡は、必ずしもいつも同じではないようである。しかしながら、これら四聖人は偉大な普遍的な自然の法則に従って、人心の開発・救済に献身したことについては、事実同じである (T. II. pp. 389-390 へ新版⑥一八四頁)。

かくして廣池は新しい文明の創造のため、最高道徳を明らかにする道に入ってしまった。彼はモラロジの文字に彼の崇高な熱誠の靈気を吹き込んだのである。

四 未来のモラロジに向かつて

現在、思想の一般的潮流は、民主的、個人主義的である。ときどきそれらに批判もされているが、モラロジの伝統の原理は保守的のように思われている。私たちはあまりに性急であり、多くの世代や何世紀にもわたって考えるということができない。アメリカの思想は一般的に、民主主義的、個人主義的である。アレクシス・ド・トクヴィルは『アメリカの民主主義』(初版一八三五—一八四〇年) (Henry Reeve text revised by Fran-

cis Bowen, 2 vols. New York: Vintage Books, 1945) を書いているが、その中でアメリカ人の国民性を個人主義 “individualism” という言葉を使って初めて表現している。それは一八四〇年のことである。

またマーク・トウェインは『ハックルベリー・フィンの冒険』(一八八四年)を書いたが、そこに出てくる公爵や王様は無頼漢で、王族というのはミシシッピ河の筏の上でのみ容認された詐欺師にすぎない。彼らは根こぎにされた人である (Oscar Handlin, *The Uprooted*, New York, 1951)。貴族主義的位階はアメリカのフロンティアでは価値はない。アメリカ社会は表面上平等社会である。人は「平等に創られた」。しかし社会的、経済的階級には大きな相違がある。実業界のリーダーの中には自分の会社が破産したにもかかわらず巨額のボーナスを恥知らずにも手にした者もいる。

ベンジャミン・バーバー (Benjamin R. Barber) の『万人の貴族制：教育の政治学とアメリカの未来』(*An Aristocracy of America*, New York, Ballantine Books, 1992) もベンジャミン・バーバーに一石を投じる本である。

廣池もアメリカの独立と国民性を賞賛している。そして建国の

父親たち、ジョージ・ワシントン、ジョン・アダムズ、トマス・ジェファソン、ベンジャミン・フランクリンをほめている (T. III, p. 147) (新版⑦三四二頁) ほか。

ヘンリー・アダムズはさきほどのジョン・アダムズ (第二代大統領) の曾孫で、第六代大統領ジョン・クワインシ・アダムズの孫でもあるが、中世ヨーロッパと現代アメリカについて名著を書いている。『モン・サン・ミシエルとシャルトル―十三世紀の統一の研究』と『ヘンリー・アダムズの教育―二十世紀の多様性』の研究』である。十三世紀には聖母マリアに対する信仰で統一していた。二十世紀のシンボルはダイナモ (発動機) である。私たちは中世ヨーロッパの十三世紀には戻れない。統一された宇宙、最高の自分を見つけることはできても、それは不可能である。私たちは今、地球温暖化、環境問題、地球生態系の混乱、医療・科学技術による生命操作等、多くの問題を抱えている。この宇宙的二十一世紀において、最高道德の道へ進んでいく英知と勇気を持つことが切に要請されているのである。

参考文献

Adams, Henry. *Mont-Saint-Michel and Chartres: A Study of the Thirteenth-Century Unity*, 1904, 1913, and *The Education of Henry*

Adams: A Study of Twentieth-Century Multiplicity, 1907, 1918.

Barber, Benjamin R. *An Aristocracy of Everyone: The Politics of Education and the Future of America*. New York, Ballantine Books, 1992.

Beattie, James. *Elements of Moral Science*, vol. I, 1790, vol. II, 1793, Philadelphia, Press of Mathew Crey, 1790-1793.

Bentham, Jeremy. *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, 1789.

Emerson, Ralph Waldo. "moral science" in *The Conduct of Life*, Chapter VI, 1860, *The Complete Works*, vol. VI.

Eliot, Thomas Stearns. *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotations of Ezra Pound*, Edited and written an Introduction by Valerie Eliot (A Harvest Special, New York, 1971). [T・S・エリオット著、福田陸太郎・森山泰夫注訳『荒地』大修館書店、一九六七年]

Franklin, Benjamin. His letter to Joseph Priestley on February 8, 1780, *The American Tradition in Literature*, 7th ed. by George Perkins, et al, New York, McGraw-Hill, 1990.

Ferguson, Adam. *Principles of Moral and Political Science*, 2 vols. 1792, Edinburgh.

Handlin, Oscar. *The Uprooted: The epic story of the great migrations that made American people*. Grosset & Dunlap, New York, 1951.

廣池千九郎『廣池博士全集』第一冊 (『中津歴史』『皇室野史』『日本文法つらばの研究』) 第二冊 (『支那文典』) 第三冊 (『東洋法制史序論』『東洋法制史本論』) 第四冊 (『伊勢神宮と我国家』『神宮中心国体論』)

『伊勢神宮』『日本憲法淵源論』『稟告』初版 昭和十一年 第二版 昭和四十三年 広池学園出版部。

——『新科学としてのモラロシーを確立する』為の最初の試みとしての道徳科学の論文』モラロシー研究所 千葉県 一九二八年 第一九版 新版 全十巻。[Hiroike, Chikuro. *Towards Supreme Morality: An Attempt to Establish the New Science of Moralogy: The English translation by the Institute of Moralogy*, 4 vols. 2002.]

川窪啓資『トトノゴロから比較文明へ』近代文芸社 二〇〇〇年。
Payne, G. *Elements of Mental and Moral Science*, 1828: the first appearance of 'moral science' in the *OED*.

Plato. *Republic I and II*, tr. by Paul Shorey, Loeb Classical Library, 1st, 1935, 1970. 『プラトーン 世界の名著七』『国家』田中美知太郎他訳 中央公論社 一九六九年]

Porter, Noah. *The Elements of Moral Science: Theoretical and Practical*, New York, Charles Scribner's Sons, 1885.

Stephen, Leslie. *The Science of Ethics*, London, Smith, Elder, 1882, Thoemmes Bristol, reprinted in 1991.

——Ed. *The Dictionary of National Biography* (1886-91).
Schneider, Herbert W. *A History of American Philosophy*, Forum Books, New York, 1946, 1957.

Sidgwick, Henry. *The Methods of Ethics*, 1st, 1874, 7th ed. 1962.
Spengler, Oswald. *Der Untergang des Abendlande*, 1918-22, Verlag C.

H. Beck München, 1998. [村松正俊訳『西洋の没落』改訂版 五月書房刊]

Tocqueville, Alexis de. *Democracy in America*, Henry Reeve text,

revised by Francis Bowen, 2 vols. New York: Vintage Books, 1945.

Twain, Mark. *The Adventure of Huckleberry Finn*, 1884.

Wayland, Francis. *The Elements of Moral Science* (1st ed. 1835) edited with a detailed introduction by Joseph L. Biau, and was published from Harvard Univ. Press in 1963.